イベント記述的性格をもつ受動的代名動詞

井 口 容 子

1. 問題の所在

次の文を考えてみよう。

(1)Vraiment la foule s'amusa. On chansonna l'aventurier vaincu. «Les amours de Lupin.» «Les sanglots d'Arsène!…» «Le cambrioleur amoureux.» «La complainte du pickpocket!» Cela *se criait* sur les boulevards, cela *se fredonnait* à l'atelier.

じっさい，群衆はおもしろがった。敗北した冒険家の流行歌がうたわれた。「アルセーヌのすすりなき！」「巾着切りの嘆き！」それは盛り場で高唱され，職場で口ずさまれた。

(Leblanc, M., *L'aiguille creuse*)[1)]

この文にみられる *se criait*, *se fredonnait* という二つの代名動詞の用法をどうみなすべきか。「高唱され」「口ずさまれた」という日本語訳にもあらわれているように，これらの代名動詞は受動のニュアンスをもつものである。したがっていわゆる「受動的代名動詞」[2)]とみなすのが，まず妥当と考えられるところだろう。たしかにこれらの代名動詞の表層の主語は，論理的には他動詞 *crier*, *fredonner* の直接目的語に相当するものであり，さらに「潜在的動作主」の存在も想定されることから，受動的代名動詞としての特性をかなり備えているものであるということができる。しかしながら，この二つの代名動詞は，主語の属性を記述するものではない。この文は属性記述的な文ではなく，イベント(event)記述的な性格をもつ文なのである。この点はかなり重要なものであると思われる。

春木(1994, 1996, 1997)は，一貫して，受動的代名動詞と中立的代名動詞を分ける最も重要な点として，前者は「主語の指示対象の特性を記述」（春木 1994:33）するものであるのに対し，後者は「何らかの過程(procès)，出来事(événement)を述べる」(*Ibid.*)ものであるという立場をとる。また Fagan(1992)は，英語のいわゆる「中間構文(middle construction)」と「能格構文(ergative construction)」（それぞれフランス語の受動的代名動詞，中立的代名動詞に対応）を分けるきわめて重要な特性は，前者は状態(state)記述的であるのに対し，後者はイベント記述的である点である，

としている(p. 146)。

たしかに受動的代名動詞の典型的な例としてあげられるものは，次の(2)にみられるように，属性記述的な性格をもっている。

(2)a. Ce veston se lave en dix minutes.
(Ruwet 1972)
b. Ce livre se lit facilement.

だが，フランス語の文章を読んでいると，時に例(1)のような，むしろイベント記述的性格を持つと思われる用例に出会うことがあり，受動的代名動詞の本質について考えさせられる。

本稿においては，類型論的視点もとりいれながら，またフランス語以外のロマンス語研究においてしばしば話題になる「非人称の *se*」と呼ばれる構文も考慮に入れながら，受動的代名動詞の問題を考えていきたい。

2. 受動的中相の二つのタイプ

Kemmer (1993)は，言語類型論の立場から中相(middle voice)を分析する，興味深い文献である。フランス語の代名動詞も，中相カテゴリーとみなすことができる。

Kemmer (1993)は受動的な意味をもつ中相を，二つのタイプに下位区分している。第一のタイプを，Kemmer は«facilitative»と呼ぶが，これは英語の *The branch breaks easily*, *This book sells well*, *This wine drinks like water* といった文に代表されるもので，難易，比較等を表す表現を伴うことが多い。これらは主語の指示対象の特性もしくは属性を記述するものであり，フランス語の受動的代名動詞も含めて，受動的中相の典型的な例としてあげられるものの大部分はこのタイプに属するといえる。

一方，第二のタイプの例として，Kemmer はフランス語の *Cela ne se dit* をあげている。このタイプの受動的中相文は，第一のタイプとは異なり，主語名詞句の属性を記述するという機能はもっていない。受動的中相のもつ諸特性のうち，もっぱら動作主をめぐる特性，すなわち想定される動作主が不特定多数の人々であるという特性が結晶したのが，この構文であるといえる。Kemmer はこのタイプの中相文は，意味的レベルにおいて，非人称構文に近いものであると指摘する。また，フランス語の場合は，この構文をとるものは直接目的語を要求する他動詞に限られているが，スペイン語やドイツ語の場合は自動詞も可能であるという。

(3)a. スペイン語

Se habla mucho aquí.

'One talks a lot here, there's a lot of talking here.'

b. ドイツ語

Hier tanzt sich gut.

'One can dance well here.'

(以上 Kemmer 1993 : 148)

3. ロマンス語の「非人称の *se*」

ところで，Kemmer (1993)が(3a)を例としてあげていることからもうかがえるように，このタイプの中相文は，ロマンス語研究において「非人称の *se* (impersonal *se*)[3]と呼ばれている構文を含んでいる。「非人称の *se*」はフランス語以外のロマンス語においてみられる，代名動詞の次のような構文である。

(4)スペイン語

a. Se viola los reglamentos abiertamente.

'On viole les règlements ouvertement.'

b. Se caminó todo el dia.

'On a marché toute la journée.' [4]

(5)イタリア語

a. Si costruisce troppe case.

'On construit trop de maisons.'

b. Si va a teatro.

'On va au théâtre' [4]

(6)ポルトガル語

Vende-se estas casas.

'On vend ces maisons.'

(Naro 1976)

この構文において，動詞は常に3人称単数の形態をとる。これは，いわゆる「受動的代名動詞」と大きく異なる点である。(7), (8)は受動的代名動詞の例であるが，それぞれ(4a), (5a)と比較すると，この違いが明らかになって興味深い。

(7)Los reglamentos *se violan* abiertamente.

'Les règlements se violent ouvertement.' [4)]

(8)Troppe case *si costruiscono*.

'Trop de maisons se construisent.' [4)]

また例文(4b), (5b)が示すように，このタイプの代名動詞は，他動詞のみならず，自動詞からも形成される。

Naro (1976)は，「非人称の *se*」の構文は，本来再帰代名詞であった *se* (*si*)が，通時的に再分析を受け，主語代名詞とみなされるようになったものであるとする。この構文における *se* は，補語としてではなく，ちょうどフランス語の *on* やドイツ語の *man* と同じように，不特定多数の人間を指す，主語代名詞として機能しているというのである。

4. 文法化

近年，言語類型論および認知言語学の分野において，中相(middle voice)の機能拡張の過程を「文法化(grammaticalization)」の事例としてとらえる研究がなされており，注目に値する。フランス語の代名動詞の問題も，この観点から考察すると興味深いものがある。

ラテン語の *se* がそうであるように，さまざまな言語において，本来は「再帰」の標識として用いられていた形式が，しだいに「中相」の意味領域を表す標識として用いられるようになっていくという現象がみとめられる。これに関しては，Kemmer (1993),柴谷(1997)が詳細な分析を行なっているが，これをまとめると次のようになる。この過程はまず中相領域の中でも「身体的行為の中相(body action middle)」とよばれる下位クラスからはじまる。次に「自発的中相(spontaneous middle)」とよばれる領域に，この形式は浸出していく。いわゆる「中立的代名動詞」は，このタイプの中相である。そして「受動的中相(passive middle)」（フランス語では「受動的代名動詞」に相当）にこの形式が及ぶのは，これらより遅い時期になる。

それでは3節でみたロマンス語における「非人称の *se*」はどうだろうか。Naro (1976)はこのタイプの代名動詞の成立は，受動的代名動詞よりさらに遅いという。Naro によれば，動詞が常に3人称単数の形態に限られるという，一致(agreement)に関するこの構文の特性が確立したのは，16 世紀のことであるという(Naro 1976 : 781)。

このような点を考慮すると，「非人称の *se*」は，受動的中相からさらにもう一歩，文法化の進んだ段階であると考えることができる。

5. 例文(1)再考

筆者は，本稿の考察の出発点となった例文(1)は，2節でみた Kemmer (1993)のいう第二のタイプの受動的中相文に属するものであると考える。この文は，主語名詞句の属性を記述する文ではない。受動的中相の持つ諸特性のうち，動作主が不特定多数であるという特性が前面に出てきたタイプの文であると考えられる。

ただ，フランス語の代名動詞は，他のロマンス語とは異なり，文法化のさらに進んだ段階と考えられる「非人称の *se*」の用法は有しない。スペイン語の例文(4a)やイタリア語の(5a)のような，被動者が複数名詞句であるにもかかわらず，動詞が3人称単数の形態をとるという構文はフランス語には存在しない。また(4b), (5b)にみられるような，自動詞が同様の構文をとるという現象もフランス語においてはみられない。再帰代名詞の *se* を主語代名詞とみなすという再分析はフランス語においては行なわれていないということである。

例文(1)は，意味的には「非人称の *se*」の構文に非常に近いものであるが，統語的なステイタスとしては，あくまで「受動的代名動詞」の枠から出るものではない，ということができる。このことは，(1)における *se criait*, *se fredonnait* がいずれも半過去の形態をとっていることからもうかがえる。受動的代名動詞が点括相を表す動詞形態とは共起しないという，いわゆる「アスペクト制約」はよく知られている。このため受動的代名動詞の用例の多くは直説法現在形であるが，過去におかれる場合は半過去形をとることが多い。この点においても例文(1)は受動的代名動詞の枠にとどまっているといえる。

ところで受動的代名動詞には，習慣・反復を表すという用法がある。これに関しては，春木(1994, 1996)が興味深い分析を行なっている。春木(1996)は，習慣的な読みをもつ受動的代名動詞の例として，次のものをあげている。

(9)a. Les asperges se cuisent à feu doux.

b. Le bébé se changent toutes les trois heures.

c. Les consonnes finales ne se prononcent pas en français.

d. Le vin blanc se boit frais.

これらの文と，例文(1)は共通するところがある。(1)は「習慣」を表すものではな

いが，半過去におかれた動詞の形態が示すように，「反復的」な出来事の生起を表しているのである。

だが，(1)は次の二つの点において(9a-d)とは異なる。春木(1994)は，(9b)，(9c)のような例文をとりあげて，このような習慣的な読みを持つ文は，実際には「反復的な過程を表わしていたり，ある不特定な過程の生起からの一般化を表わしていたりする」(p.44)と述べている。例文(1)は，不特定な過程の反復的な生起を表すという点では，これらの文と共通しているが，そこから何らかの「一般化」を引き出しているわけではない。

また，春木(1996)は，習慣的な読みを持つ受動的代名動詞の発話は，「その読み以外に必ずモダリティーを含む読みを持つ」と指摘する(p. 184)。(9a-d)のような発話に対しては，「…すべきである」という「規範」の解釈が直観的にまず浮かぶという。これに対して，例文(1)には，「規範」，「可能」等いずれのモダリティーも感じられない。

例文(1)は，主語名詞句の属性を記述する文ではない。また，出来事の記述を通して，そこからある一般化を引き出し，結果的に主語名詞句に内在する何らかの特性あるいは属性を述べることになるといった性格の文でもない。人々が「高唱し」，「口ずさんだ」という，ある具体的な時期に反復的に起こった「出来事」を，そのままに，淡々と記述する文なのである。そしてその行為を行なった主体，動作主は，不特定多数の人々である。

6. 結語

以上，例文(1)を出発点として，受動的意味を持つフランス語の代名動詞を考察してきた。例文(1)は，典型的な受動的代名動詞の文とかなりの特性を共有しながらも，イベント記述的性格を持つ点で，大きく異なっている。この点においては，むしろ他のロマンス語においてみられる「非人称の *se*」の構文に近いものを感じさせる。

受動的代名動詞を中相範疇全体の中に位置付けながら，さらにその特性を明らかにしていくことを今後の課題としたい。

注

1) Maurice LEBLANC, *L'Aiguille creuse*, Librairie Générale Française, 1964, p. 128.
日本語訳：石川湧『奇巌城』，東京創元社, 1965, p. 146.

2)「受動的代名動詞」は，Ruwet (1972)以来「中動的代名動詞(construction pronominale

moyenne)」と呼ばれることが多く，筆者もこれまでの研究でこの用語を用いることが多かった。しかしながら，「中動(moyen)」というのは本来，ヴォイスのカテゴリーであり，代名動詞の一用法ではなく，むしろ代名動詞全体を指す用語として用いたいものである。特に近年，言語類型論等の分野においては，ロマンス語の代名動詞も中相(voix moyenne)の実現形としてとらえ，個々の用法もその全体像の中で位置付けていくという傾向がみられる。このため本稿でもあえて「受動的代名動詞」という用語を用いることにする。

3) イタリア語を対象とした研究では「非人称の *si*」と呼ばれるが，ここでは用語が煩雑になるのを防ぐため，「非人称の *se*」で統一することにする。

4) 例文(4)-(5)および(7)-(8)の出典は以下の通りである。

(4a-b), (7) : Contreras, H.

(5a) , (8) : Rizzi, L.

(5b) : Napoli, D.J.

なお本稿における引用は，Zribi-Hertz (1982)による。

[参考文献]

Fagan, S.M.B. (1992) : *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*, Cambridge University Press, Cambridge.

春木仁孝(1994) : 「中立的代名動詞と受動的代名動詞」,『日仏語対照研究論集』, 日仏語対照研究会.

春木仁孝(1996) : 「現代フランス語の再帰構文再考 —意味解釈の仕組みとモダリティー—」,『言語文化研究』第 22 号, 大阪大学言語文化部.

春木仁孝(1997) : 「意味カテゴリーとしての再帰 —現代フランス語の場合—」,『言語文化研究』第 23 号, 大阪大学言語文化部.

Kemmer, S. (1993) : *The Middle Voice*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

Naro, A. J. (1976) : "The Genesis of the Reflexive Impersonal in Portuguese", *Language* 52. 4.

Ruwet, N. (1972) : *Théorie syntaxique et syntaxe du francais*, Seuil, Paris.

柴谷方良(1997) : 「言語の機能と構造と類型」,『言語研究』第 112 号, 日本言語学会.

Zribi-Hertz, A. (1982) : "La construction "*se*-moyen" du francais et son statut dans le triangle : moyen-passif-réfléchi", *Linguisticae Investigationes* 6-2.

Sur la construction pronominale passive qui est de caractère événementiel

Yoko IGUCHI

On note souvent que le caractère essentiel de la construction pronominale passive consiste en ce qu'elle décrit une propriété du syntagme nominal sujet, et non un procès ou un événement. Cependant, à la lecture des textes en français, on rencontre parfois des phrases qui ont bien un sens passif et sont pourtant de caractère événementiel. Dans cette étude, nous nous concentrons sur une de ces phrases et nous l'analysons sous plusieurs aspects. Voici la phrase en question:

(1) Cela *se criait* sur les boulevards, cela *se fredonnait* à l'atelier.
(Leblanc, M., *L'aiguille creuse*)

Cette phrase se rapproche de la construction pronominale impersonnelle («*se*-impersonnel»), reconnue dans des langues romanes autre que le francais, en ce qu'elle ne se réfère pas à la propriété inhérente du patient, mais seulement au caractère indéfini de l'agent. Mais elle se différencie du «*se*-impersonnel» par ses valeurs morpho-syntaxiques. D'autre part, elle partage quelqu pes propriétés avec la construction pronominale passive au caractère «itératif».

On pourrait situer cette phrase à la frontière des deux constructions pronominales : passive et impersonnelle. L'existence même de ce type de phrase révèle la complexité du problème. Pour bien expliquer une telle phrase, il faut considérer la totalité du système de la construction pronominale.